

小学校における交流及び共同学習の現状と課題

—A市の通常学級担任と特別支援学級担任への質問紙調査を通して—

Questionnaire Survey on Exchange and Joint Learning for Pupils of Regular Class and Special Needs Class

遠藤 恵美子¹ 佐藤 慎二²

小学校における交流及び共同学習の現状と課題を明らかにすることを目的に、A市内の通常学級担任と特別支援学級担任への質問紙調査を実施した。その結果、①いずれも、人間関係に関するねらいを重視している、②その教育効果について、通常学級児童は高く評価されたが、特別支援学級児童に関しては評価が低かった、③その要因として、「打ち合わせの不足」が主に指摘された。合わせて、今回の調査結果を踏まえ、よりよい交流及び共同学習のありようについて小考を試みた。

キーワード：交流及び共同学習、特別支援学級担任、通常学級担任、連携

I 問題と目的

文部科学省は「特別支援教育の推進について（通知）」（平成19年4月）において、特別支援教育の理念として、「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成」を掲げた。中でも、交流及び共同学習は「双方の子どもたちの社会性や豊かな人間性を育成する上で、重要な役割」（「交流及び共同学習ガイド」文部科学省）を果たすとしている。また、その実施にあたっては、「双方の児童の教育的ニーズを十分把握し、校内の協力体制を構築し、効果的な活動を設定すること」（小学校学習指導要領総則）としている。小学校におけるよりよい交流及び共同学習の実践的な追究は、今日的な課題となっている。

交流及び共同学習に関して、山本・佐藤（2007）は、その展開の仕方によって、①生活年齢学年の交流学級との個別交流、②特別支援学級が主体となって展開する交流などの5つのパターンがあることを示した。また、星野・佐藤（2011）は、特別支援学級児童にとって、通常学級に「行く交流」よりも特別支援学級に通常学級児童を「招く交流」において

児童の意欲が高まることを明らかにした。合わせて、「行く交流」に関する評価が高くない点については特別支援学級担任の尽くせる手立てには限界がある点を指摘した。しかし、「行く交流」に関して、受ける側の通常学級担任の手立てに関しては調査対象とされなかった。

そこで、本研究では特別支援学級児童が通常の学級に「行く交流」に焦点をあて、通常学級担任の手立ても含めて検討することで、交流及び共同学習の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 調査対象

A市内小学校で校内の「交流及び共同学習」を実施している10校の、通常学級担任61名と、特別支援学級担任19名（知的障害学級10学級 自閉症・情緒障害学級8学級 難聴1学級）を対象とし、調査を依頼した。

2. 調査方法と回収率

通常学級担任用と特別支援学級担任用の2種類の

1 野田市立木間ヶ瀬小学校

2 植草学園短期大学

調査用紙を作成し記入を依頼した。調査期間は7月の2週間とし、自由記述を含む選択回答で、無記名での回答である。回収したアンケート用紙を集計分析の対象とした。回収率は100%（部分空欄を含む）であった。

3. 調査項目

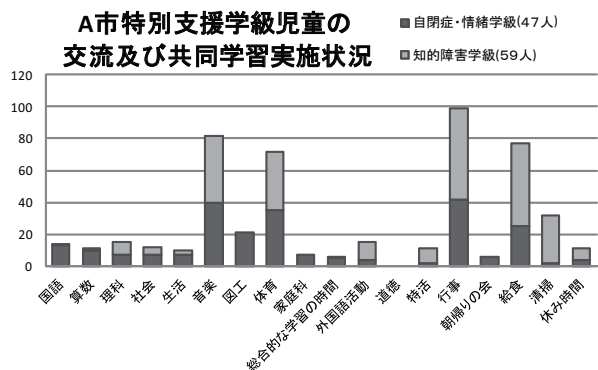
交流及び共同学習の実施状況・目的・成果・課題・障害理解教育の実践・授業づくりでの配慮・児童間の関係を深めるための配慮・学習参加のための配慮・連携・校内体制

*尚、小論では「交流及び共同学習」を以下、「交流」と略記する。

Ⅲ 結果と考察

1. 交流の実施状況について

音楽、体育や行事、給食、清掃などでの交流が主であり、国語、算数等の教科学習での交流は少ない。この結果は、国立特別支援教育総合研究所の「交流及び共同学習に関する研究(3)」の調査結果とも合致する。そこでは、「教科の特性として系統的・理論的な学習内容であることから、日常的に交流を行っていくためであると考えられる」と考察されている。

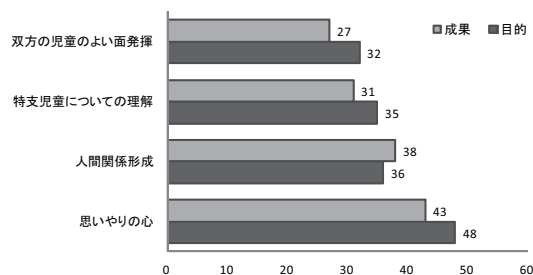
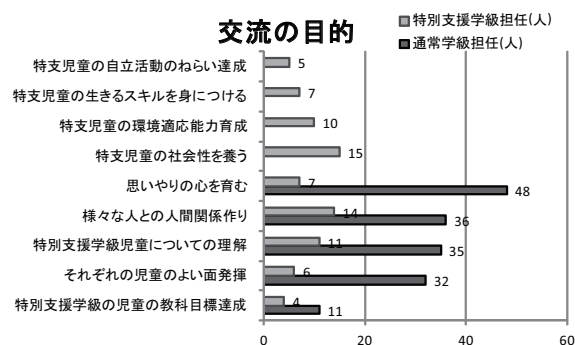


2. 交流の目的と成果

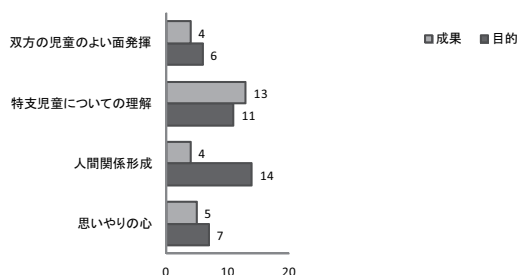
*次図の上段4項目は特別支援学級担任のみへの設問項目

交流の目的については次表のように、通常学級担任においては「思いやりの心を育む」「人間関係づくり」「特別支援学級児童の理解」を挙げている。

特別支援学級の担任は「人間関係作り」「特別支援学級児童の理解」を挙げており、交流への双方の期待はほぼ一致している。



通常学級担任の回答 (61人中)



特別支援学級担任の回答 (19人中)

次に、通常学級担任において高い回答率であった4項目について、上図のように、目的と成果の関わりで比較してみた。すると、通常学級担任は目的としてねらったことについて、一定の成果を上げたとして評価している。

一方、特別支援学級担任は「特別支援学級の児童についての理解が促された」ことについては約70%の担任が成果として挙げているが、「人間関係づくり」については成果を上げていないと感じていることが明らかにされた。

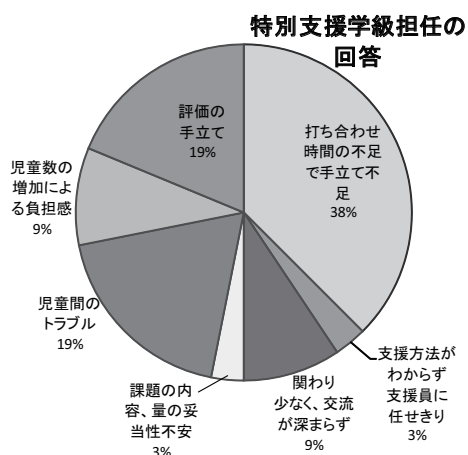
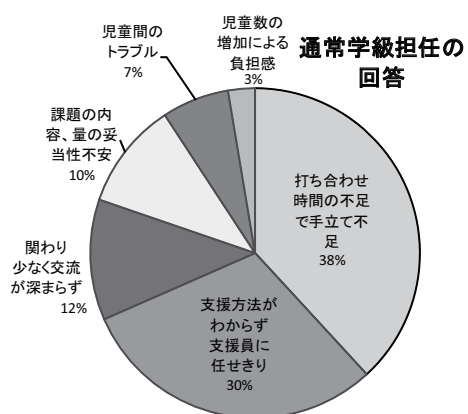
特別支援学級担任には、児童にとっての交流のねらいの妥当性やその交流活動で求められる具体的な手立ての有効性の検討が求められよう。通常学級担任は特別支援学級担任との連携を図り、特別支援学級児童の教育的ニーズにも応えられるような授業改善に取り組んでいく必要があると考える。

3. 交流における課題

通常学級担任、特別支援学級担任ともに、打ち合わせ時間の不足による連携不足を第一にあげている。交流のねらいとして、特別支援学級児童の「人間関係の形成」を挙げるとするならば、打ち合わせの不足は大きな課題として指摘されよう。

通常学級担任だけに限れば、「打ち合わせの不足」と「支援方法がわからず支援員に任せきり」と合わせて、約70%を占めている。連携がうまくできずに、特別支援学級児童に対して、適切な支援ができていないのか不安を抱えている現状が明らかになった。

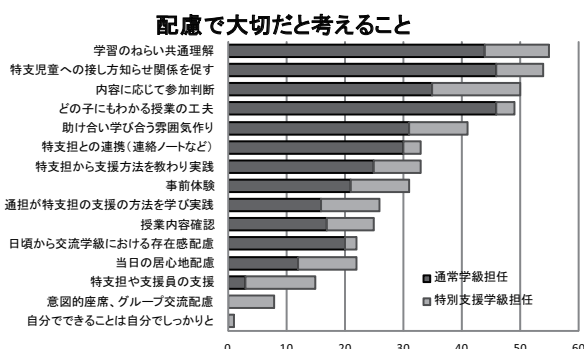
特別支援学級担任の回答では、打ち合わせの不足に続いて、「児童間のトラブル」を指摘する割合が高い。ある程度想定されるトラブルであるならば、事前にそのための支援を検討・共通理解し、交流に送り出す必要があるだろう。



4. 交流時の配慮、手立てについて

先に、課題で指摘された内容に対応するために、特別支援学級担任は「内容に応じて参加判断」、「特別支援学級担任・支援員による（直接的な）支援」を強めるという対応をしている。

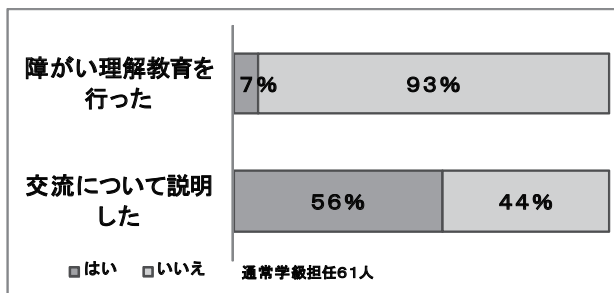
一方、通常学級担任は、「特別支援学級の児童への接し方について知らせ関係を促すこと」、「どの子にもわかる授業の工夫」「学習のねらい共通理解」を挙げている。特別支援学級と通常学級の児童双方の教育的ニーズに応じた支援を行うために、授業の中で的確に対応しようとする姿勢が伺える。また、それらに続いて「内容に応じて参加判断」という指摘も多い。特別支援学級児童への支援に不安を感じている通常学級担任の立場では、授業内容との関係で交流への参加そのものを判断したいとの思いの表れであろう。



5. 障害理解教育への取り組み

〔「障害」の表記について、アンケート内では、A市の「障がい」と表記する通知に準ずる）障がい理解教育を行ったのは4名。特別支援学級担任が「難聴」について交流学級で行った（2名）特別支援学級担任が特別支援学級について説明した（1名）車いすの児童がいるので車いすの扱いについて説明した（1名）との取り組みがあり、それ以外は特に障がい理解授業を意図的には行っていない。理由として「一年生の時から普通に交流してきたので……」「昨年からの続きなので」「自然に」「子どもたちは当然だと思っている」等が指摘され（27/61名）、低学年から積極的に交流の機会を設けて、実践的な場面の中で理解を進めている様子が見えてくる。

「障がい理解教育」が積極的に実施されていない背景には、「打ち合わせの不足」に象徴される準備

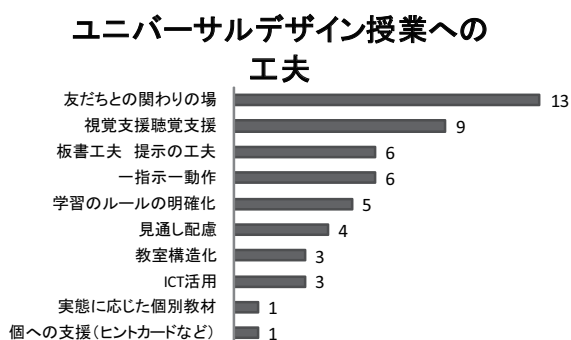


時間等の制約、一方で、温かい学級風土づくりや自然な交流が促される教育活動を通して、お互いの理解が深まっていくと考えられていることによるだろう。

6. ユニバーサルデザインの授業への取り組み

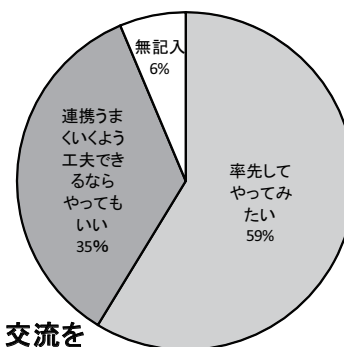
先に触れたように、通常学級担任が交流の配慮として第一にあげているのは「どの子にもわかる授業の工夫」(46名)であった。そのうち、「特別支援学級の児童のことも考えてわかりやすい授業を心がけている」と回答したのは19名であった。さらに、どのような工夫をしているのか具体的に質問したところ、第一に指摘されたのが「友だちとの関わりの場」であった。

これまでの調査結果を踏まえて小考するならば、通常学級担任として「関わりの場」を工夫することで、通常学級児童への教育効果は確認されるものの、特別支援学級児童に対しては不安を感じているということであろう。

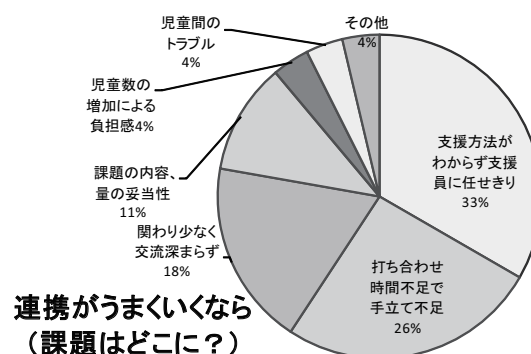


7. 交流に対する今後の展望

今後の交流に対して尋ねたところ、約60%の通常学級担任が「学級の児童に得るものが多いので率先してやってみたい」と回答している。また、「連携がうまくいくなれば来年以降もやってみたい」とい



交流を打診されたら.....



連携がうまくいなら(課題はどこに?)

う回答が35%あった。その回答者の課題は「打ち合わせ不足」で「支援方法が分からない」ことが指摘される。

未記入を含めれば、約40%の通常学級担任が、交流に関して不安を感じている。「率先してやってみたい」と考える通常学級担任の中にも、同様の思いを抱くケースは少なくないだろう。それを踏まえるならば、双方の児童にとってのよりよい教育効果という観点から、交流実施の是非を判断する姿勢も求められよう。

IV 総合考察

上記の結果と小考及び関連の文献検討を踏まえて、今後の検討課題として以下の5点を指摘した。

1. 特別支援学級児童の立場での交流の目的と手立ての再確認

今回の調査から、通常学級担任、特別支援学級担任の双方から、「通常学級児童への教育効果」が指摘された。しかし、特別支援学級児童に関しては、通常学級担任、特別支援学級担任とも評価が低い。特に、特別支援学級担任は、交流の目的として、

73%が「人間関係の形成」を挙げているが、目的が達成されたと考える担任はわずか29%であった。

特別支援学級担任が交流の目的として、ある子どもに期待することは何なのか？それを具現化する手立ては何なのか？本来は、特別支援学級だけでは補いきれない“目的・内容・手立て”があり、特別支援学級の教育課程の一貫として通常学級の場で実施する教育活動が交流である。

特別支援学級担任は、児童一人ひとりの交流の妥当性・有効性、そして、限界も含めて検討すべきだろう。例えば、教科学習の交流で多い「音楽」「体育」の場合には、本来、教科学習のねらいがある。そこで「人間関係の形成」を期待することは、相容れない側面がある。これは、少なくとも、課題として一番多く指摘される「打ち合わせ時間の不足」の問題ではなく、教育目的・内容論の問題である。

ある交流活動において、妥当性の高い目的と有効な手立てを講じることができるのか否か、教育効果が期待できるのか否かを問いながら、交流のよりよい展開を追究したい。

2. 通常学級担任主体による授業ユニバーサルデザイン・モデルの可能性

特別支援学級の児童に関する情報が限られた中であって、40%を越える通常学級担任は「どの子にもわかる授業づくり」「その児童への接し方を伝える」等を基軸に、よりよい交流の具現化に努力している。授業づくりにおける具体的な工夫は「友達との関わり場」「視覚支援の工夫」が多く挙げられた。様々な制約がある中でも、通常学級担任がイニシアチブを発揮する中で、交流の実質を高めようとするモデルである。

しかし、特別支援学級児童の障害特性を把握した上でその児童に「ないと困る」支援で、どの児童にも「あると便利」な支援を増やすことがユニバーサルデザインの方向性であることを踏まえるならば、「打ち合わせ時間の不足」は大きな制約となる。双方の担任が必要最低限の時間を捻出し、その児童の得意・不得意の共通理解を図る必要がある。

共生社会の実現が求められる今日、授業ユニバーサルデザイン・モデルは－通常学級担任主体という側面で－その時代を先取りする可能性を秘める。筆

者の一人である遠藤はこの点を実践的に検討し、その研究成果は「平成23年度千葉県長期研修生 研究報告書－特別支援教育－」（千葉県総合教育センター）及びその補足資料に掲載予定である。

3. 「招く交流」モデルの可能性

本調査では「招く交流」は対象としていない。しかし、すでに指摘してきたように、特別支援学級が主体となって計画する活動に、通常学級児童を「招く交流」が展開されている。さらに、「招く交流」の方が、特別支援学級児童の目的が明確になり、手立てを尽くしやすいことも指摘されている。

向野ら（平成21. 22. 23年度 船橋市教育委員会指定「健康教育公開研究会児童案集」）は、生活単元学習「みんなでクリア！マリオランド」を展開し、特別支援学級児童と教師が構築した巨大な遊び場に通常学級全児童を招待して、約一ヶ月間連日遊ぶという活動を展開した。

キーワードは「触れ合い」「話し合い」「譲り合い」「助け合い」「認め合い」「楽しさや喜びの分かち合い」であり、様々なゲームコーナーには“一人では絶対にクリアできない＝協力しなければならぬ仕掛けと工夫”が凝らされている。正に、特別支援学級児童が主体となって展開されるモデルである。

「行く交流」では特別支援学級児童は通常学級児童に「してもらう経験」が圧倒的に多くなりがちだが、ここでは、全くその逆の構図が展開される。「してあげる経験」を多く積むことで、たくましい人間関係力と自信を育む試みである。

「招く交流」モデルは、対等な関係で活動しやすいため、交流の一つのありようとして、今後さらなる検討が求められる。

4. 通常学級担任と特別支援学級担任の打ち合わせ・連携の工夫

連携の工夫には、ノートやファイルの用意があげられた。自由記述で紹介されたある小学校の事例では、連絡ノートがノート 1/4 サイズで、学習内容、持ち物、場所、次回の予定などが箇条書きやメモ書きで記入される。さらに、「生活科でやったことを、担任の先生に話そう」などの課題（宿題）や、行事の準備の変更など、枠を作らず自由に活

用されていた。

学校現場が多忙化する今日、「打ち合わせ時間の不足」を解消することは容易ではない。打ち合わせや具体的な連携をどのように工夫するのか、各校の取組のアイデアを共有する必要がある。

5. 児童の満足度という指標が重視される時代へ

今回の調査では対象にしなかったが、特別支援学級児童がどこまで交流を望んでいるかという点の吟味も今後は欠かせないだろう。児童本人が期待して、意欲的に取り組むからこそ教育効果が上がる。教師が期待したい児童の姿・活動のねらいの検討と実施後の評価をする一方で、児童の満足度・自己評価という指標から交流を見直す観点も大切にしていきたい。

文献

- 星野謙一・佐藤慎二（2011）：特別支援学級における交流及び共同学習に関する実態調査—交流及び共同学習の形態に焦点を当てて—，植草学園短期大学紀要第12号。
- 向野紀子（2011）：平成21、22、23年度 船橋市教育委員会指定「健康教育公開研究会児童案集」，船橋市立芝山東小学校。
- 山本亜紀子・佐藤慎二（2008）：特別支援学級に在籍する児童・生徒の交流及び共同学習に関する調査—特別支援学級担任と通常学級担任を対象として—，植草学園短期大学紀要第9号。